障害者目線で補助器具を提案する脳性まひ患者

曽我部（そがべ）　弘樹（ひろき）さん(51)

黄ばんだ電子文字盤の上をせわしなく動く左手の人さし指は、たこで赤く膨れていた。「おうごんのひとさしゆび」。打ち込んだ言葉を見せ、人懐っこく笑う。

仮死状態で生まれ、脳性まひで手足や口を思うように操れない。六歳で電動タイプライターに出合い、指一本で「頭の中の言葉を伝える驚き」を知った。活字を組み合わせて描く「タイプアート」やCG制作、作曲も手がけ、言葉にできない思いも表現してきた。

二〇一六年、障害者の暮らしを支える道具を当事者目線で提案する「日本ユニバーサルデザインライフ協会」を立ち上げた。排せつを補助する器具のアイデアを練るほか、今年七月に開所した「岐阜県障がい者芸術文化支援センター」で、障害者らの相談にも乗る。

不自由が当たり前。そんな障害者として生きるのが、たまらなく面白い。「物事の本質が見え、思いもしない考えが浮かぶ」。文字を打つ指は、障害で勝手に曲がらないよう、牛乳パックで手作りした筒状の指輪で固定している。

「困ったまま諦めるなんてもったいない。障害を補うツールがあれば、できることはたくさんある」。岐阜市在住。（兼村優希）

この人